

睡眠

	No.	表題	症状・BPSDについて 起こった出来事	事例提供者	背景や生活状況、病状など	症状・BPSDに対して 行った支援	結果 その後のご本人、介護者の状態
1	1	夜に眠れない	昼夜逆転により、夜間1人で椅子に立ち上がって神棚の物を取ろうとしたり、オムツを脱いでいることが多くなっていた。	訪問看護ステーション 看護師	娘と2人暮らし。同居していた夫を亡くし、活気が低下。丸1日以上眠ったり昼夜逆転がある。	別室で休んでいる娘が本人が動いたことに気づけるように、センサーマットを導入した。	危険行動は回避できている。
	2		睡眠リズムが整わず、夜間に目が醒めてしまう。目が醒めると歩行器で隣の部屋に行き、尻もちをついてしまった。	居宅介護支援事業所 ケアマネジャー	妻と2人暮らし。前頭側頭型認知症と診断されている。近所に住む娘が就労しながら支援している。失語がある。自発性低下で外出の機会が減り、日常生活動作も低下してしまっている。	主治医に薬の調節をしてもらっているが、今のところ変化はみられない。隔週でショートステイ、デイサービスの利用を追加して、家族が休める時間を作った。	今も眠れない日は多い。家族は、自宅で本人を看たいと考えており、ショートステイとデイサービスを利用しながら続けていくしかないと思っている。（入所やレスパイト入院、ロングショートは家族が希望していない）
2	3	昼も寝てしまう	朝食の用意をして娘は出社している。昼に訪問すると机に朝食や薬が残ったままであり、本人は眠っている。夜も眠れていると話しているが、昼も眠ってしまっている。お薬カレンダーにも残薬があり、失禁、意欲の低下、物忘れ、幻覚がみられている。	訪問看護ステーション 看護師	娘家族と同居。パーキンソン病、消化器系疾患がある。日中誰かは家にいるが、家族は別々の部屋にいて、介護はほぼ受けていない。伝い歩きでトイレへの移動は可能。食事は自立している。	娘に日中の様子や状況を報告するようにし、ヘルパーの導入の必要性を何度も家族に伝えた。訪問回数を増やしたり、訪問時間の調整や他職種にも情報伝達した。また、昼に訪問し、内服と食事の確認をしてから入浴介助やりハビリをするようにした。	ヘルパーの導入や訪問看護の回数を増やしたり時間調整により、昼間起きていることが増え、昼の内服忘れが減った。